

千葉商大紀要 第57巻 第2号 (2019年11月) pp. 1-15

〔論 説〕

1908年ロンドン・オリンピックにみる伝統とナショナリズム*

大 賀 紀代子

はじめに

2020年、東京でオリンピックが開催される。1964年に開催されて以来となる日本での夏季オリンピックである。アジアで初となった1964年夏季オリンピック東京大会で、東京は大きく変化した。東海道新幹線や首都高速道路が造られ、国内外からの観客のためのホテルの建設等が進んだ。さらに、競技場として代々本国立競技場をはじめ、多くの施設が整備・建設されていった。オリンピック競技を世界水準の環境で遂行できるよう、日本は準備を進めていったのである。現在においても、1964年東京オリンピックの遺産は多くの場所で目にすることができる。高度経済成長期の日本が、世界に向けてその経済力を、国際的なビックイベントを通じて世界に向けてアピールしたのであった。

1964年東京オリンピックから、55年以上がたった今日、2020年に開催される夏季オリンピック東京大会にむけて、準備が急ピッチで進行している。再開発が行われ、東京に漂っていた昭和の雰囲気が、少しずつ失われていくように感じられるなか、ポスト工業化期の日本が必要とするたくさんの建物がつくられ、都市がより機能的になるよう変化している。

オリンピックは、開催国およびその他多くの国々に対し、多面的な意味合いをもっている。「スポーツ競技をおこなう」という古代オリンピックからの意味合いはもちろんの事、教育的な意味合い、経済的な意味合い、そして文化的な意味合いなどである。オリンピックが参加国に与える教育的・経済的・文化的影響や参加国が期待するその効果は、オリンピックがもつ約120年の歴史のなかで、その時代の求めに応じて変化していった。

そして、オリンピックがもつ意味合いが変化していくなかで、国・人種・性別・階級などに対するオリンピックの捉え方も変化していった。

例えば、第1回夏季オリンピックアテネ大会では、アジアの国々の参加はほとんど見られなかった。その上、女子選手の参加も歓迎はされなかった。その後、世界情勢の変化に伴い、参加国・参加地域の増加、アフリカ系・アジア系人種の参加、女性のメダリストの誕生、すべての階級の自由な参加、がみられるようになっていった⁽¹⁾。

本研究では、どのような過程を経て、「階級」などの古くからの社会的な隔たりを乗り越え、現在のようにすべての人々の参加が認められるオリンピックになっていったのか、という点に焦点をあてている。その中でも特に、「資本主義者社会における労働者」が、どのような経緯を経て、オリンピックの参加者としての地位を確立していったのか、その

*本稿は千葉商科大学経済研究所研究プロジェクト「オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察」における研究成果の一部である。

(1) 脚注(14)参照。

背景にある政治的・経済的・社会的・文化的な要因を明らかにすることを、本研究の大きなテーマとして掲げた。

この大きな疑問を解決する足掛かりを見出すべく、その第1歩として、まず本稿では、1908年に開催された第4回夏季オリンピックロンドン大会に着目し、その様子をみていきたい。

1. 1900年前後におけるオリンピック

19世紀の終わり、「近代オリンピック」が初めて開催されたときその目的は「教育」であった。

1896年、第1回近代オリンピックがアテネで開催された。この開催を先導したのが、ピエール・ド・クーベルタン (Pierre de Coubertin) であった。フランス人の教育者であり歴史家であったクーベルタン男爵は、古代ギリシャ世界の競技大会として開催された「古代オリンピック」を、近代に「復興」させようと考えた第一人者であった。彼が提唱したのが、1896年より始まった「近代オリンピック」である。

クーベルタン男爵は、決してナショナリズムの高揚や開催国の経済効果を考え、オリンピックを「復興」させようとしたのではなかった。彼の真の目的は「教育」であった。教育者であったクーベルタン男爵は、「教育改革の一環として母国フランスに競技スポーツを導入しようとする取り組み」のなかで、オリンピックを捉えた。これがそもそものオリンピック「復興」の出発点であった。

この発想は、彼が持つ「競技スポーツが学生の人格形成に寄与する」という信念から導き出されたものであった。そのため、近代オリンピックは、当初、道徳的・倫理的な側面を特に重要視した。スポーツ競技に勝った、負けたということが重要なのではなく、競技を通じて、優れた精神性を身に着けるための、国際的なイベントであった。彼は競技スポーツが人格形成にプラスに作用すると考えたのである。オリンピックの理念は、この観点から生まれているといえる。競技に勝つことではなく競技を通じて人間として優れた精神性を獲得すること、それこそがオリンピックの目的であり意味であった。つまり、オリンピックは、「スポーツ競技を通じた人格形成のための国際的な教育の場」であった。クーベルタン男爵にとって、オリンピックの開催は学校のような教育機関の設立と類似であったと推察されよう。事実、彼は、当時のイギリスにおけるパブリック・スクールで行われていた体育教育に強い影響を受けていたのである⁽²⁾。

クーベルタン男爵の「教育としてのスポーツ」という観点から始まった近代オリンピックは、現在、文化的な意味合いを強く持っている。2020年の東京オリンピックにおいて「文化プログラム」が存在している。オリンピックは先に述べたように「スポーツの祭典」である。しかし、それと同時に、現在、「文化の祭典」でもあるといえる。オリンピックの開催にあたっては、オリンピック精神の普及を目指すという視点から、スポーツ競技と同時に文化芸術の振興も重要なテーマとなっている。国際オリンピック委員会 (IOC) の「オ

(2) 村田奈々子「近代オリンピックの始まり—普遍的理念とナショナリズムのせめぎ合い」橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリンピック』第5章山川出版社、2016、198-204。

リンピック憲章」には「オリンピックの根本原則」が書かれてある。この「オリンピックの根本原則」には、「スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである」と定義されている。つまり、オリンピックは、先にのべた教育的な意味合いを持つだけでなく、文化的な意味をも持つスポーツの祭典なのである⁽³⁾。

この「文化プログラム」は 2012 年ロンドン大会によって、一段と重要性を増すこととなったと考えられている。文化・芸術により重きをおいて開催されたロンドン大会は、イギリス・ロンドンが経験する 3 度目の夏季オリンピック大会であった。同じ都市で 3 度も夏季オリンピックが開催されることは、現在においても前例はない。1908 年、1948 年そして 2012 年という 3 度のオリンピック招致に成功したイギリスは、オリンピックへの熱が高く、非常にスポーツと歴史的なつながりが深いと言わざるを得ない。

1908 年にロンドンで開催された夏季オリンピックは、オリンピックの歴史において、非常に意義のある大会であった。それは、古くからスポーツに対し「アマチュア」という概念が根深く存在したイギリスで、オリンピックが開催されたという点にある。そもそも、近代オリンピックを提唱したクーベルタン男爵は、オリンピックを「アマチュア」のみを参加選手として開催すること理想とした。先に述べたように、彼は古代オリンピックの復興を「教育改革の一環としてフランスに競技スポーツを導入しようとする取り組み」という視点のなかで捉えた。そして、その教育のモデルとして、当時のイギリスで行われていたパブリック・スクールの教育をモデルとしたのであった。そこで行われていたスポーツ教育を、フランスにも導入すること模索するなかで、オリンピックの復興というアイデアとイギリスのスポーツ教育がつながっていった。つまり、彼のなかにあったオリンピックの復興という考えの裏には、イギリスのスポーツ教育がイメージされていたのである⁽⁴⁾。

当時のイギリスで古くから存在していたスポーツに対する「アマチュア」という考えには、現在、一般的に使われている「スポーツを職業化していない人」という意味以上の意味が存在した。

1866 年、イギリスの「アマチュア運動競技協会 (Amateur Athletic Association)」は、同連盟が開催する大会の参加者を「アマチュアおよびジェントルマンに限る」と規定しようとした。この際、「アマチュアではない、参加不可となる人物の条件」が明記されていた。そこには、主に 3 つの項目が存在し、①賞金を目当てにプロフェッショナルと競技をした者②生活費を得るために競技を教えた者③職業者であれ雇用者であれ、機械工・熟練工・非熟練工として働いている者、であった⁽⁵⁾。つまり、「金を稼ぐためにスポーツをす

(3) 太下義之「オリンピック文化プログラム序論—東京五輪の文化プログラムは二〇一六年夏に始まる」東京文化資源会議編『TOKYO1/4 と考えるオリンピック文化プログラム—2016 から未来へ』序章、勉誠出版、2016、2；国際オリンピック委員会『オリンピック憲章（2019 年 6 月 26 日から有効）』日本オリンピック委員会、2019、10。

(4) クーベルタン男爵は、1870 年から 71 年におきた独仏戦争における自国軍隊の敗戦に失望した。そして、当時、世界的強国であったイギリスでは体育教育をおこなっており、それが一因となってイギリスは強国として君臨できていると彼は考えた。そのため、フランス軍強化のためには、イギリスが行っているような身体的教育が必要であるとクーベルタンは主張したと考えられている。ジュールズ・ボイコフ（中島由華訳）『オリンピック秘史—120 年の覇権と利権』早川書房、2018、35；ヴォルフガング・ペーリンガー（高木葉子訳）『スポーツの文化史—古代オリンピックから 21 世紀まで』法政大学出版局、2019、372。

る者」または、「資本家の下で働く者」は「アマチュアではない」ということである。言い換えるならば、「金を稼ぐためにスポーツをする者」または「産業革命期において誕生した経済のシステムのなかで、金を稼いでる者」は「アマチュアとは認めない」ということである。「イギリス産業革命期において誕生した経済のシステムのなかで、金を稼いでる者」は、イギリスの伝統のもとに培った貴族的な価値観では、「アマチュア」ではないのである。

当時、「アマチュア運動競技協会」のメンバーである人々は、「アマチュア」＝「ジェントルマン」という価値観を持っていた。当時の「ジェントルマン」は、生活費を稼ぐことは恥とされた。彼らの価値観のなかでは、産業革命以前のイギリスの価値観にもとづき「ジェントルマン」は規定されていた。そのため産業革命後に新しく誕生した工業化社会のなかで、資本主義の下、生活をする人々は、「ジェントルマン」としては捉えられないと考えたのである。つまり、18世紀後半からのイギリス産業革命により誕生した新しい社会・ビジネスの仕組みのなかで活躍する人々は、彼らにとって、「ジェントルマン」ではなかったといえる。そして、労働の対価として金銭を授受しない「ジェントルマン」こそ、彼らにとっての真の「アマチュア」であり、同協会が主催するスポーツイベントの参加者として迎え得る存在であったのである。

しかし、このスポーツイベントを、貴族的価値観による「アマチュア」という観点から開催することに、イギリス国内において、反対意見も存在した。1865年に誕生した「イギリス・オリンピック協会 (National Olympian Association)」は、「国民の全階級の人々に、スポーツイベントの参加の機会は開かれるべきである」ことを主張した⁽⁶⁾。

スポーツの参加選手に対する意見の対立は、当時のイギリスが抱えていた階級間の対立と深くかかわっていた。イギリスでは、ジェントルマンは生計を立てるために「労働」をする必要がなく、労働者階級とは明確に分けられていた。有閑階級であり、狩猟や競馬といったスポーツと社交に明け暮れ、無償で政治を行い、「高貴な地位に伴う義務(ノブレス・オブリージュ)」を果たすのみであった。彼らはジェントルマンであることに執着した。さらにはジェントルマンになることを目指し何世代もかけて完全なジェントルマンになっていった産業資本家も存在していた⁽⁷⁾。資本家にやとわれ、日々の暮らしのために、金銭を稼ぐ「労働者階級」とは、ジェントルマンは異なる世界に暮らしていたのである。そして、彼らにとって、スポーツとは「無償なるもの」であった。しかし一方で、労働者階級にとって、スポーツは「有償」であり、スポーツ競技で金銭を稼ぐことも可能であった。つまり当時、スポーツの商業化は、労働者階級では行われていたのである⁽⁸⁾。この階級間のスポーツに対するとらえ方の違いは、彼らの間に大きな認識の差を生んだ。第1回近代

(5) 小川勝『オリンピックと商業主義』集英社、2012, 61-62. : ボイコフ『オリンピック秘史』2018, 41. : P. D. Coubertin, *Olympism: Selected Writings*, N. Muller (ed.), Lausanne: International Olympic Committee, 2000, 599.

(6) ベーリングガー『スポーツの文化史』2019, 353.

(7) 村岡健次・川北稔『イギリス近代史』ミネルヴァ書房、2003, 188. : 村田奈々子「近代オリンピックの創始者 ピエール・ド・クーベルタン—ヨーロッパの才能のひとつのかたち」『子どもと発育発達』第13巻4号, 251-255, 2016, 252. 首相ロバート・ピール (Sir Robert Peel) を出したピール家などはこれに該当する。彼はイギリス産業革命の中心地であるランカシャー州出身であった。

オリンピックが開催された 1896 年、イギリスをはじめヨーロッパの国々では、「中産階級および労働者階級の政治参加」を無視できない状況にあった⁽⁹⁾。つまり、労働者階級が国政に対し、力を持ちはじめたのである。この社会情勢のなかで、多くの国が交えるオリンピックという国際的なスポーツイベントに、工業化期以前の価値観に従った「労働者を排除するアマチュア」という概念を持ち込むことは、世界的な政治の動き・社会の動きと、大きなずれが生じることとなろう。スポーツを民主化するという考えと、裕福なものだけがスポーツをするべきという身分・階級社会よりもたらされる古くからの考えとの対立は、クーベルタン男爵に「アマチュアのみが参加するオリンピック」の実現に待ったをかけることとなった。彼は、「アマチュア」の定義を曖昧にし、イギリスのジェントルマンがもつ「アマチュア」の価値観に近いものを採用することで、国際的なオリンピックの開催にこぎつけたのである⁽¹⁰⁾。

しかし、国際的なスポーツイベントである近代オリンピックがイギリスの貴族社会のもつ伝統的な価値観により規定された「アマチュア」の範囲でおこなわれることに対し、クーベルタン男爵自身が妥協を余儀なくしたにも関わらず、実際にはイギリスのスポーツ界において、1960 年代までこの「スポーツはジェントルマンのものであり、貴族社会が規定するアマチュアによりおこなわれるものである」という価値観は頑なに守り続けられた⁽¹¹⁾。

このような背景をもつイギリスで、1908 年に第 4 回夏季オリンピックロンドン大会が開催されたのである。このようなスポーツに対する貴族的価値観をもつイギリスで開催されたオリンピックでは、一体、どのような問題がおきたのであろうか。次章では、この点について考察していく。

2. 1908 年夏季オリンピックロンドン大会

先に述べたように、クーベルタン男爵の熱意により始まった「オリンピック復興」の試みは、1896 年第 1 回夏季オリンピックアテネ大会として開花した。この第 1 回夏季オリンピックは、ギリシャのアテネを開催都市とし、4 月 6 日から 4 月 15 日の 10 日にわたり開催された。14 の国および地域が参加し、参加選手は 241 人であった。実施された競技は 8 つであり、陸上・体操（ウエイトリフティングも含む）・水泳・フェンシング・レスリング・自転車・射撃・テニスであった。この 8 つの競技で 43 の種目が実際された。最も参加国が多かった競技が陸上であり、10 カ国が競技に参加した。最も出場者数が多かった競技は射撃であり、116 人の選手が競い合った⁽¹²⁾。

古代オリンピックが途絶えてから約 1500 年の歳月を経て開催されたこの第 1 回夏季オ

(8) スポーツの商業化は、17 世紀よりロンドン市民の間において、ボクシングなどの競技で見られた。バーリンガー『スポーツの文化史』2019、300-301。

(9) 村岡・川北『イギリス近代史』2003、222-223。などを参照されたい。

(10) ボイコフ『オリンピック秘史』2018、42。

(11) 1930 年代にはイギリスにおいてプロスポーツへの転向が多く見られたが、実際には 1960 年代までこの価値観は根強かったと考えられている。バーリンガー『スポーツの文化史』2019、395。

(12) 「歴代オリンピックでたどる世界の歴史」編集委員会『歴代オリンピックでたどる世界の歴史—1896—2016』山川出版社、2017、12.; 武田薫『オリンピック全大会史』朝日新聞出版社、2019、48。

リンピックは、21世紀の今日のオリンピックのイメージとは大きく異なるものであった。例えば、2016年にブラジル開催された第31回夏季オリンピックリオデジャネイロ大会は、8月5日から8月21日までの17日間を開催期間とし、第1回夏季オリンピックよりも一週間長く開催されている。期間の延長は、参加国の増加、参加選手の増加、実施競技の増加といったことと深くかかわっている。第1回夏季オリンピックが、参加国・地域が8だったのに対し、第31回夏季オリンピックでは参加国・地域は207となり、約26倍に拡大した。参加選手は11,238人となり、約96倍となった。この参加選手の増加は、競技数の増加と関連している。第1回夏季オリンピックでは先に述べた8つの競技のみであったのに対し、第31回夏季オリンピックでは28にまで増加し、多様化したのである。それに伴い実施種目も増加し、43種目から306種目にまで拡大したのである⁽¹³⁾。

この第1回夏季オリンピックでは、女子選手の参加は認められていなかった。また、黒人選手の参加も認められないなど、性別・人種による差別が色濃く存在していた⁽¹⁴⁾。それに加え、「アマチュア」という概念に対しても、現在とは大きく異なる。

規模も理念も今とは異なる形で、第1回目の近代オリンピックは幕を開いたのである。

その後、2回の夏季オリンピックを経て、12年後にイギリスで開催されたロンドン大会では、第1回夏季オリンピックに比べ、開催時期、参加国・選手、実施競技数や種目にも大きな変化がみられるようになっていた⁽¹⁵⁾。

4月27日から10月31日という6か月以上にわたり開催された第1回目のロンドン・オリンピックとなる第4回夏季オリンピックロンドン大会には、22の国・地域が参加していた。この半年という開催期間の長さは、いままで開催された31回の夏季オリンピックのなかでは最長であった。参加選手の数には2,008人にも上り、23の競技が実施された(実施種目数は110)⁽¹⁶⁾。

テニスの室内試合を皮切りにオリンピックの競技は開始され、10月19日から31日にかけて行われたサッカー、ラグビー、ボクシング、ラクロスの試合で競技は全日程終了した。このロンドン大会では、当時としては巨大な競技場が建設・準備された。この競技場は‘The Stadium’、‘The Great Stadium’もしくは‘White City Stadium’とよばれ、このロンドン大会と時期を同じくして開催されていた万国博覧会である Franco-British Exhibition の会場と隣接するように建てられていた⁽¹⁷⁾。

当時のオリンピックは、万国博覧会と同時に開催される性格のイベントであった。「文化・芸術的な側面」の強調が薄く、万国博覧会に付属するスポーツイベントとして認識されていたのである⁽¹⁸⁾。そのためか、第4回夏季オリンピックロンドン大会も、Franco-British Exhibition と時期を同じくし、メインとなる会場も同じエリアに設けられていた。

(13) 「歴代オリンピックでたどる世界の歴史」編集委員会『歴代オリンピックで』2017, 131. : 武田『オリンピック全大会史』2019, 359.

(14) ベーリンガー『スポーツの文化史』2019, 407, 422.

(15) IOCの見解において、1906年に開催されたアテネ大会は、正規の夏季オリンピックとして認識されないとされている。「歴代オリンピックでたどる世界の歴史」編集委員会『歴代オリンピックで』2017, 23.

(16) 「歴代オリンピックでたどる世界の歴史」編集委員会『歴代オリンピックで』2017, 26. : 武田『オリンピック全大会史』2019, 70. フィギュアスケートなどの今では冬の競技とされるものも実施された。

(17) L. Harris, *Britain and The Olympic Games, 1908-1920*, Palgrave Macmillan, 2015, 8-9.

この大会で大きく変化したのは、オリンピックの規模だけでなかった。参加方式が大きく変化した。現在、オリンピックの参加者は、各国のオリンピック委員会を通じて、参加の申し込みをするというシステムである⁽¹⁹⁾。しかし、第1回から第3回までの夏季オリンピックでは、参加者は自国のオリンピック委員会を通じて申し込むのではなく、各個人で申し込みを行った。そのため「自国の代表」という自覚や意味合いは薄かったと考えられる。この第4回夏季オリンピックロンドン大会において、正式に、各参加者に対し「選ばれた自国の代表選手」という認識・見方や解釈が付け加わることとなったといえる。「各種目の国の代表者」という立場を担った選手同士の戦いは、「国の戦い」という捉え方に置き換えられ、オリンピックというスポーツ競技を通じて、参加国の国民にナショナリズムの高揚を促したと考えられよう。それをよく表していたのが、開催国イギリスとアメリカとの関係であった。競技を通じ、両国の国民は互いの互いに対する国民感情の悪化をうみだした。当時、イギリスはパクス・ブリタニカに象徴されるほどの経済大国であった。18世紀後半に始まった産業革命により、工場での機械を用いた生産に成功したイギリスは、世界のありとあらゆる国や地域に綿製品をはじめとする自国の製品を販売していた。さらに、それに伴う金融業や運輸業の発達は、イギリスを世界経済の中心にのし上げていった。第4回夏季オリンピックロンドン大会が開かれた1908年は、このパクス・ブリタニカが終焉に向かおうとする時期であった。重化学工業が発展し自動車産業・航空機産業などの「新産業」が世界のビジネストレンドとなり、それらの需要が増加していくなかで、大英帝国が産業革命以来築き上げたビジネスのノウハウや製造業の技術は、もはや世界のビジネスシーンにおいて、通用しなくなり始めていたのである。この傾向は、1914年に始まった第一次世界大戦により一層顕著となった。一方、このように経済に陰りが見え始めるイギリスに対し、世界のビジネスリーダーとして新に君臨したのが、アメリカであった。製造業を中心とし、国をあげて「新産業」への参入を積極的にかつ意欲的に進めていったアメリカは、イギリスの経済力をしのぐ勢いを当時持ち合わせていた。イギリスに代わり世界のビジネスを牽引する経済大国へと成長しつつあったのである。経済を通じて相対する状況にあり世界のビジネスシーンで覇者の座を争っていた2国の国民は、互いを経済におけるライバルとして認識していたといえよう。その国民感情が自国の代表者がスポーツ競技を通じて世界一を競うオリンピックに反映され、ビジネスに代わる戦いをスポーツの場に求めてしまったのではないだろうか。第1回から第3回までの夏季オリンピックとは異なり、競技参加者に「自国の代表者」という立場や認識を背負わされた第4回夏季オリンピックロンドン大会は、「オリンピックにおけるナショナリズム」を顕著に示す大会となってしまったといえる。

(18) 太下義之「グローバル化とオリンピック文化プログラム－2012年オリンピック大会にロンドンが勝利した理由」河島伸子・大谷伴子・大田信良編『イギリス映画と文化政策－ブレア政権以降のポリティカル・エコノミー』慶応義塾大学出版会、2012, 119.；太下「オリンピック文化プログラム」2016, 6-7.；ボイコフ『オリンピック秘史』2018, 50.

(19) 第4回夏季オリンピックロンドン大会において正式に採用された。この大会の2年前に開催されたアテネ大会でもこの参加方式は用いられてはいたが、この大会自体をIOCが正式な夏季オリンピックとしてとらえていないため、公式では第4回ロンドン大会からとなる（脚注11参照）。『歴代オリンピックでたどる世界の歴史』編集委員会『歴代オリンピックで』2017, 26.；武田『オリンピック全大会史』2019, 70.

この「オリンピックにおけるナショナリズム」を高揚させた第4回夏季オリンピックロンドン大会は、その開催に先立ち、イギリスとアメリカの間に「アマチュア」という概念における衝突があったとされる。この頃、オリンピックにおける「アマチュア」の捉え方は、イギリスのスポーツ界における「アマチュア」の概念に寄与するところが大きかった。イギリスにおける「アマチュア」の捉え方では、先に述べたように、「競技によって生計を立てる者」や「競技を教えることによって生計を立てる者」そして「資本主義下での労働者」は、「アマチュア」の定義には合致していなかった。この考え方が、1900年初頭のアメリカのスポーツ界の考え方とは、大きくかけ離れていたのである。

当時、アメリカでは、労働者階級の人々のなかでスポーツがさかんにおこなわれていた。その影響もあり、労働者階級出身のスポーツ選手が多数アメリカの代表としてオリンピックに出場する予定であった。そのため、イギリスのオリンピック委員会が、オリンピックに参加資格のある「アマチュア」の定義として、「労働者階級を心よく思わない」と規定したことに対し、アメリカ国民は大きな憤りを感じたのであった⁽²⁰⁾。自国のスポーツ界およびスポーツ文化は、国際的なスポーツのイベントである「オリンピック」の基準に見合わないのである。「競技して勝つことではなく競技を通じて人間として優れた精神性を獲得すること」を目的とする崇高な国際的イベントに、自国のスポーツの理念が適合しないことは、自国のスポーツ文化が野蛮なものであり、世界には通用しないとレッテルを張られている、そのように当時のアメリカ人が捉えてもおかしくはないといえよう。

このアメリカのサッカー界とオリンピックとの間にある「スポーツをする人々はいかなる人々であるか」という観点の大きなずれを、当時のアメリカのマスコミは大々的に報じた。『ニューヨーク・タイムズ (The New York Times)』は、「オリンピックのアマチュアリズムに階級的な傾向がある」ことを指摘する目的で、「労働者階級がほとんどを占めるアメリカのアマチュアには大打撃である」と報じたのである⁽²¹⁾。

日刊新聞『ロンドン・タイムズ (The Times)』において、ロンドン大会開催中の1908年8月10日付けの紙面には、下記のような記事が掲載された⁽²²⁾。

夏季オリンピック大会に対する批判的見解

イギリスの雑誌や定期刊行物が不公平な視点でオリンピックの試合を取り上げたことを契機とし、一部のマスコミによりスポーツ界に対して敬意のない報道がなされている。この状況に、アメリカのオリンピック委員会の理事であるサリバン氏は憤りを感じ、イギリスのオリンピック委員会の運営が公平さにかけていることを指摘している。サリバン氏はインタビューのなかで、以下のように答えている。「イギリスの大学では、スポーツ界がさもアマチュアであることを原理としているように教えている。しかし、スポーツにおいてアマチュアであることが原理であるという観点は、イギリス以外ではジョークでしかない。」奇妙なことに、思慮分別ある人々によってアメリカのスポーツ界は批判をされている。

(20) ボイコフ『オリンピック秘史』2018, 42.

(21) *New York Times*, September 6, 1907, 7.

(22) “*The Times*”, 10 August 1908, 5, *The Times Digital Archive*.

イギリスは、選手の試合中の行動をもとにアメリカのスポーツマンシップを批判しているが、そうではなく彼らの功績をたたえるべきである。スポーツのあるべき姿を一地域の考え方から捉えるべきではない。世界的な観点から捉えるべきである。将来、世界のあらゆる国の代表者で構成される国際的なスポーツの団体が、アメリカが運営するアメリカのスポーツ連合を後援したとしたら、イギリスとアメリカのスポーツをめぐる不和は減少するであろう。各国のオリンピック委員会によりオリンピックは運営されるのではなく、各国の代表者により組織される国際オリンピック委員会により、オリンピックは運営されるべきである。しかし、この場合もイギリスのオリンピック委員会が、公平な運営をおこなうかどうか、わずかながらではあるが不安は残る。

この記事からは、イギリスのジェントルマンがもつ「アマチュア」という概念を、アメリカのスポーツ界が否定的に捉えていることが確認される。このジェントルマンがもつ古くから続く「アマチュア」に対する伝統的な価値観は、国際的な視点からは、すでに時代遅れであることが指摘されている。つまり、労働者階級が台頭するなかで、その状況にそぐわない視点から「アマチュア」を解釈するイギリスのスポーツ界は、もはや他国から否定的に捉えかねない立場にあったといえる。

そして、この「古臭い」イギリスのスポーツ界と関係が深い人物がメンバーであったイギリスのオリンピック委員会によって、第4回夏季オリンピックロンドン大会は開催されていた⁽²³⁾。

第1回夏季オリンピックアテネ大会は、クーベルタン男爵もメンバーとして名を連ねる国際オリンピック委員会（IOC）が、オリンピックの運営の中心を担っていた⁽²⁴⁾。国際オリンピック委員会においては、先に述べたように、イギリスのスポーツ界の「アマチュア」という概念を全面に打ち出したオリンピックの開催が認められなかったのである。

しかし、第1次世界大戦前の世界状況の不安定さから、第2回夏季オリンピックパリ大会より開催国の運営に与える影響が多くなっていたとされている⁽²⁵⁾。パリ大会のように、第4回夏季オリンピックロンドン大会においても、古い価値観のもとでスポーツを捉えるジェントルマンを構成員としているイギリスのオリンピック委員会が運営に大きな影響をもっていたことが上記の記事から確認される。そのためか、当時において労働者階級のスポーツ参加が当然であったアメリカの国民は、第4回夏季オリンピックロンドン大会の運営に「不公平さ」・「不平等さ」を感じていたのである。

このアメリカがイギリスでのオリンピックに抱くマイナスの感情は、オリンピック開催中にも多くの衝突も生み出していた。特に陸上競技では両国の国民感情がかなり悪化したとされる。陸上競技でイギリスはアメリカに勝てなかった。アメリカは16個のメダルを

(23) 小川『オリンピックと商業主義』2012, 63. 古くからの特権階級により構成されていた。

(24) ベーリンガー『スポーツの文化史』2019, 407, 373-378.

(25) ベーリンガー『スポーツの文化史』2019, 408. 第2回夏季オリンピックパリ大会では、第一次世界大戦の影響により、IOCよりもフランスの主催者の主導によってオリンピック競技会が組織された。1908年に開催されたこの大会も、パリ大会と同様に、第一次世界大戦の世界情勢の悪化から、イギリスの主催者の影響が強かったことは容易に推察される。

獲得したのに対し、イギリスにおいて金メダルは7個にとどまった⁽²⁶⁾。労働者階級がスポーツに参加するアメリカという国が陸上競技においてイギリスに大勝利したこの大会に、イギリスの上流階級は実際あまり関心を示さなかった⁽²⁷⁾。

また、1908年7月29日付け『ロンドン・タイムズ』には、下記のような記事が掲載されていた⁽²⁸⁾。

夏季オリンピック大会
アメリカ人の心情に関して
(ロンドン・タイムズの記者からの報告)

ニューヨーク 7月28日

アメリカのセオドア・ルーズベルト大統領から、この度開かれているイギリスでのオリンピックに参加しているアメリカの代表選手へ、心のこもった電報が送られた。その内容は、彼らのオリンピックでの勝利への祝いの言葉と、選手一人ひとりに大統領自らが握手を交わしたいというものであった。この大統領から選手へ祝いの電報が送られたことは、アメリカのマスコミそしてアメリカの民衆に大いなる高揚感をもたらした。

このアメリカの勝利に関して、イギリスの反応を、批判的に報道している新聞がある。そのような新聞では、「イギリスのマスコミは新聞記事や定期刊行物のなかで、上品さもなくアメリカを非難し、大統領が祝いの電報を選手たちに送ったことをあざけり笑っている」と書かれている。不幸なことに、アメリカで書かれるイギリスに関する記事は、稀なものを除き、反イギリス的といった偏見や「他国と他民族への威圧的な態度 (spread-eagleism)」により書かれている。そのため、これらの記事は、事実に基づき書かれているかは疑わしい。

アメリカの代表団の帰国に際し、ニューヨーク州やニューヨーク市をあげて熱烈な歓迎を行う予定であり、その準備が進められている。ルーズベルト大統領・ヒューズ知事・マクシミリアン市長、そして大勢のニューヨーク市の代表者たちは、アメリカ代表選手に対する今回の熱烈な歓迎に協力的である。大統領は代表選手たちと個人的な挨拶を交わす予定である。一方で、Halswall 大尉は、T. C. カーペンターとニュージャージー州ニューアーケで優勝杯をかけた特別なレースを来月行う予定であり、彼らはとてもスポーツに熱狂している。

この記事は、ロンドン・タイムズ社の記者がニューヨークから当時のアメリカの様子をレポートしたものである。オリンピック競技で勝利を得たアメリカの代表の功績をたたえ、当時の大統領であったセオドア・ルーズベルト、ニューヨーク州知事やニューヨーク市長が参加し、国をあげてセレモニーが行われたことがうかがえる。そして、このアメリカが

(26) Harris, *Britain and The Olympic Games*, 2015, 29.

(27) Harris, *Britain and The Olympic Games*, 2015, 22-26. 一方でイギリスにおいて労働者階級はこの大会に大いに興味を示していた。

(28) "The Times", 29 July 1908, 7, *The Times Digital Archive*.

見せたオリンピック競技での勝利に対するアメリカの熱狂ぶりを、イギリス国民は冷やかな目で見ているとアメリカでは報道されている。しかし、この報道はアメリカがもつイギリスへの敵対的な感情によってもたらされたものであり、正確性に欠けると指摘されている。つまり、イギリスへの敵対的な感情のもとにアメリカではオリンピック報道がなされていた可能性がうかがえる。このことは、オリンピックというスポーツの戦いの結果を、単なるスポーツの試合という視点から見のではなく、国民同士の戦いのようにとらえていたことの表れであろう。このような視点がうまれた背景として、先に述べたように、この第4回夏季オリンピックロンドン大会では、各参加選手は個人的な応募によりオリンピックに参加するといったそれまでの大会の様式とは異なり、各国のオリンピック委員会を通じ、各国の代表選手として、オリンピック競技に出場することとなったことが深くかわっていると考えられている。このオリンピックにおける選手の在り方・立ち位置の変化が、このイギリスとアメリカの試合内容・結果をめぐる衝突に深く関係していると思われる。つまり、各国を代表としてオリンピックに参加した選手同士の戦いに国民はナショナリズムを投影したのであった。まさに「オリンピックにおけるナショナリズム」の表れであるといえる。

この代表選手を通して、そして試合を通じて感じられる各国のナショナリズムの高揚は、国際試合の延期や各国のスポーツ界への批判につながっていった。それを象徴するかのように、1908 年 11 月 19 日に刊行されたロンドン・タイムズには、下記の記事が掲載されている⁽²⁹⁾。

夏季オリンピック大会

先日「関係が分断した」アメリカアマチュア体育連合とイングランドの体育組織が、イギリスとアメリカの間での国際試合の延期を決めたことは信じがたい。この度のイギリスでの夏季オリンピックで運営に対し不満がでたことは、とても遺憾である。しかし、両国の試合の延期をもってこの度の不満を解消することは適切ではない。建設的な解決方法の一つは両国間での話し合いである。今回のオリンピックに参加した選手よりもより高いステータスにいる多くの著名人やアメリカの体育選手の間では、オリンピックのような国際試合は開催されたほうがよいとの考えがあるようだ。しかし、新しく誕生した国際的な体育団体は開催の中止に賛成している。こういった国際的な体育団体をうまく動かすには、イギリスとアメリカの両国において高い地位にある人物の関与や影響が必要であろう。そうすることで少なくとも、国際試合において、アメリカ国民が持つイギリスに対するマイナスの国民感情のなかに、イギリスに対する歩み寄りの気持ちがわずかながらうまれるかもしれない。

オリンピックの試合がその背後にとある事情をかかえていることは否定できない。その事情がイギリスとアメリカ間の国際試合に関するすべてのトラブルの要因となっている。多くのアメリカの競技参加者が所属するアメリカ体育団体にはアイルランド系アメリカ人

(29) "The Times", 19 November 1908, 7, *The Times Digital Archive*.

選手も所属しており、彼らはイギリスに対し敵対的感情をもっている。このアイルランド系アメリカ人がもつイギリス人への敵対意識がアメリカ体育団体中に充満しているということ、これがオリンピックにおけるイギリスとアメリカ間の試合の背後にあるとある事情である。イギリスの代表選手は、オリンピック会場である‘The Stadium’において、アメリカ人の代表選手と試合をしているのではなく、アイルランド人の代表選手と試合をしているといっても過言ではない。

この記事には、オリンピックでの試合がもとでおきたイギリスとアメリカの衝突により、両国間での国際試合が延期されることとなったことに加え、第4回夏季オリンピックロンドン大会の運営自体も批判の対象とされたことがうかがえる。そして、このイギリスとアメリカの試合をめぐる衝突は、アメリカの体育団体にアイルランド系アメリカ人が多数所属していたことによるものであったことが確認される。彼らは、歴史的な経緯および当時の政治状況から、イギリス人に対するマイナスの感情を抱いていたことは言うまでもない。

第4回夏季オリンピックロンドン大会が開催される約60年前にあたる1840年代に発生した馬鈴薯飢饉により、大きなダメージをうけたアイルランドは、その後、多くの移民をアメリカにおくこととなった。そのため、馬鈴薯飢饉の発生した1840年代から第4回夏季オリンピックロンドン大会が開催される1908年までのあいだに、多くのアイルランドの人々がアイルランド以外の地域に移り住んでいった。アイルランド以外の地域に移住していった人々は、イギリスに対しマイナスの感情を抱きながら、祖国を後にした。このマイナスの感情は、結果的に、ニューヨークにおいて反英感情をもつアイルランド系アメリカ人により、フィニアン会とよばれる団体を結成するに至る。このフィニアン会は、イギリスから完全に独立したアイルランド共和国を作り上げることを目指しており、この目的を達成するためにアメリカで資金を集めていた。その資金をもとに、実力行使も辞さない独立運動を展開しようと考え、イングランドで過激なデモ行進や爆弾攻撃などを行っていたのである⁽³⁰⁾。このフィニアン会に代表されるように、アイルランド系アメリカ人は、アメリカに移住後も本国のイギリスからの独立を心から望んでいた。そして、その思いはイギリスで開催された第4回夏季オリンピックロンドン大会においても如実に現れたのである。

このオリンピックに現れたイギリスに対するアイルランド系アメリカ人の感情は、この第4回夏季オリンピックロンドン大会のイギリスの代表選手のほとんどが、イングランドの選手であったことにも起因していると考えられる。当時、イギリスのスポーツ界は、イングランドに根付くスポーツの伝統に基づいていた。そのため、スポーツにおいて、‘British’らしさはイコール‘Englnad’らしさであった。そこにアイルランドの文化や精神は大きく反映されておらず、古くからのイングランドの貴族の伝統的な価値観に依拠し、イギリスのスポーツは解釈されていた⁽³¹⁾。国際的なスポーツのイベントにおいて、イギリスのスポーツとは、イングランドのスポーツのことを指し示すと公言されたようにアイルランド系の人々の目には映ったであろう。イギリスの代表者が憎きイングランドの代表者と

(30) 村岡・川北『イギリス近代史』2003, 211-213.

(31) Harris, Britain and The Olympic Games, 2015, 12.41.

して規定されていることは、アイルランド系アメリカ人が、イギリスの代表者を試合相手以上に敵としてみなし、試合に臨んだ一因として十分に理解できる。

おわりに

以上、1908 年夏季オリンピックロンドン大会の様子について述べた。この大会では、イギリスの古くから価値観が、イギリスとアメリカとの間に大きな溝を作る結果となった。

この価値観は「スポーツ＝ジェントルマンのみが参加するもの」という考え方である。この考えは、近代オリンピックが誕生した 19 世紀終わりにおいても、イギリス国内に根強く存在していた。

この考えのもとでは、労働者にはスポーツイベントに参加する資格がなかった。なぜなら、日々の生活ために労働の対価として金銭を得ている者は、ジェントルマンとはみなされなかったからである。この考えは、労働者階級の政治参加が加速する 1900 年前後のヨーロッパ諸国において、不釣り合いな価値観となっていた。

そのため、プロスポーツが盛んであり、労働者の間にスポーツ熱の高まりがみられた当時のアメリカにとって、このイギリスの考え方は理解しがたいものであった。このスポーツ熱は、当時のオリンピックでのアメリカの活躍にも表れていた。

アメリカにおいてオリンピックに対する国民の期待や関心がとても高い一方で、イギリスではオリンピックに対する上流階級の関心はとても低かった。しかし、驚くことに、オリンピックの期間中、労働者は競技に関心を示していた⁽³²⁾。

労働者のオリンピック参加を快く思わない委員のいるイギリスのオリンピック委員会が運営を担うロンドンでのオリンピックは、アメリカ国民にイギリスへの対抗意識を芽生えさせた。そして、その感情は、自国のイギリスからの独立を願うアイルランド系アメリカ人の心にある敵対心を助長することとなったのである。

第 4 回夏季オリンピックロンドン大会は、20 世紀初頭の社会がもつ「階級」間の問題や、国家間の政治的・歴史的な問題を、スポーツを通じて浮き彫りにした大会であったといえる。

オリンピックは、その後も人種・ジェンダーなどの問題を抱え、それを克服しながら、現在のような 200 以上の国・地域が参加する世界規模のスポーツイベントにまで成長した。そして、スポーツ競技の領域にとどまらず、文化・芸術の領域においても、独自の役割を担うこととなった。文化的役割は、先の述べたように、2012 年の第 30 回夏季オリンピックロンドン大会により大きく飛躍したのである。

イギリスで開催されるオリンピックは、本稿で述べたような古くからの価値観と新しい価値観との対立や、文化的役割の重要性のさらなる増加、といったことに象徴されるように、オリンピックに新しい課題や役割を担わせるきっかけを与えたのではないでだろうか。

今後、オリンピックの長い歴史において重要な大会となったと思われるイギリスでのオリンピックを、さらに深く考察していきたい。そして、オリンピックにおけるイギリスの果たした役割を明らかにすることで、「オリンピック」という国際的なスポーツイベント

(32) 脚注(27)参照。

が社会・経済・文化に与えた影響をより明らかにしていきたい。

(2019.9.26 受稿, 2019.11.21 受理)

〔抄 録〕

本稿では 1908 年第 4 回夏季オリンピックロンドン大会が与えた社会的な影響について考察をおこなった。

この大会にはイギリスの伝統的な価値観である「スポーツ競技はジェントルマンである上流階級が行うもの」という考えが色濃く存在した。この価値観は、ヨーロッパにおいて労働者の社会的・政治的な台頭が著しい 20 世紀初頭の風潮とそぐわず、さまざまな問題を引き起こした。特に労働者のスポーツ参加が顕著であったアメリカにとって、この価値観はイギリスへの敵対心を芽生えさせた一因となった。また、この価値観により、経済的・政治的理由などによりイギリスからアメリカに移住を余儀なくされた歴史をもつアメリカ系アイルランド人は、競技を通じ、イギリスへの敵対的な感情を一層増殖させた。

さらに、自国のスポーツ連盟を通じてオリンピックに参加するという仕組みを採用したことにより、「オリンピック選手＝国の代表」という価値観が生まれ、スポーツを通じての国家間の戦いという意味合いが強調される結果となった。

このように、1908 年第 4 回夏季オリンピックロンドン大会は「オリンピックにおけるナショナリズム」を高揚させるものとなったといえる。